

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(23)

幼かったころに聴いた歌、口ずさんだ歌は、歳月を経るほどに郷愁を誘い、その時代へ呼び戻してしまふことがある。演奏もまたそうした力を持っている。

あれはいつのころだったろうか。住田町上有住で新緑の季節に行われた「花と緑の観賞会」で、今は故人となられた紺野澄雄さんのヴァイオリン演奏を聴いた。上有住城跡の東屋と住田町役場上有住支所の二階のホールに「北上夜曲」「ふるさと」「赤とんぼ」の曲が流れた。

誰もが知っている曲は、生活空間としての風景や人々の営みが詰まった暮らしの情景を思い起こさせる。私たち五葉山

自然倶楽部で澄雄さんがもっとも得意とする領域、それがヴァイオリン演奏による「森の音楽会」である。

澄雄さんと同じ上有住の八日町に住む佐々木祐一さんのギターとの二重奏は、学校や地区の行事で地域の方々に親しまれ、「名コンビ」であった。

澄雄さんは今から十八年前の一九九一年一月、突然病魔に冒され、二度にわたる大きな手術を受けた。以来自分の体調と相談しながらの日々が続く。勤めていた会社を辞めざるを得なかった。自分の体調に合わせた仕事を見い出そうと専門外の電気について猛烈に勉強をする。愚痴も言わず、

弱音も吐かず、痛みをこらえて国家試験取得に邁進する。

新たな仕事は、電気施設設置がうまく作動しているかどうかの点検業務である。一軒一軒自分の力で顧客を見つけ、少しずつ仕事の領域を増や

お願いしたところ「仕事の都合と体調が良ければいいよ」と快く受けてくれた。後で聞いたこと

だが、残された自分自身の人生の時間を知っていたという。これが最後の演奏となることを悟っての承諾であった。

「森の音楽会」 紺野澄雄さんを偲ぶ

五葉山自然倶楽部事務局長

千葉 修悦

す。二〇〇六年一月に再び体調を崩し、これまで続けてきた仕事をほかの人に頼むこととなる。無念であったに違いない。

この年の八月十日、住田町が主管して「道の日」記念行事が催されることになっていた。かつての街道を散策したいと

その日はただ立っていても汗ばむくらい暑い夏の日だった。もとの上有住小学校で、今は住田町民俗資料館の玄関右の教室の廊下側、気仙川に向かつて澄雄さんは立っている。目線の先には、きつとあの上有住城跡の森が見えていたはずだ。

午後一時、演奏が始まる。「北上夜曲」がゆくりと流れる。教室の視線がヴァイオリンに注がれる。廊下や窓からも顔、顔、顔。それぞれが思い

出をたどっているようにも見受けられる。曲は「ふるさと」「赤とんぼ」「かあさんのうた」と続く。

このとき澄雄さん自身も演奏しながら、幼かったときのこと、小学校や中学校のこと、青春時代、社会人としての歩み、結婚、子どもたちのことを思い浮かべていたような気がする。一曲で

い。決して怒ることも、人を叱り責めることもない。いつもじっと人の話を聞く。自分自身の考えや意見を持ちながらも黙ってうなずく。内面を磨き続けることの美しさや、そんな所作に見るこ

ことが私たちの誇りだ。私は「北上夜曲」「ふるさと」「赤とんぼ」「かあさんのうた」、その一曲一曲の詞を自分自身の歩みと重ね合わせていた。澄雄さんのヴァイオリンを思いながら。

五葉山麓のあすなろ山荘で、上有住城跡で、民俗資料館で、上有住小学校で演奏した曲の数々。澄雄さんと五葉山自然倶楽部で一緒に活動できた

を進める、真面目で誠実な努力家」と妻の恵子さん。二人の子どもたちの社会人としての門出を確認するかのよう、二〇〇七年五十七歳で逝く。

リレー
エッセイ



1998年2月22日、五葉山自然倶楽部創立の日にて得意のヴァイオリン演奏を披露し、新たな門出に華を添えた澄雄さん